

イソップをおはなし会に取り入れる

2014年のおはなし会で、イソップのおはなしを取り入れたという
安富ゆかりさんと宮田桂子さん。おはなし会は、東京都下のJR駅隣接ビル内にある書店の
児童書売場スペースで、毎月1回開かれています。おふたりに、お話を伺いました。



Q 取り組みのきっかけや様子を教えてください。

こちらのおはなし会では、年間を通したテーマを決めて、毎月のおはなし会を考えるやり方をしています。今までも、「イソップのおはなし」が年間テーマの候補に挙がることはあったのですが、手ごわそうで、なかなか取り上げる決心がつきませんでした。2014年は、勉強するつもりで頑張ってみよう!ということで、取り組みました。毎月1つのおはなしを選んで、プログラムに入れていきました。1年で、12のおはなしを読んだこととなります。

Q おはなし会に取り入れるとき、考えたことは?

イソップのおはなしに、季節を表す言葉は少なかつたように思いますが、せっかくなので季節感は、できる限り意識しました。初夏にはカエルの出てくるおはなし、ブドウの出てくるおはなしは秋といった具合です。イソップのおはなしを決めたら、プログラム全体の流れを考えて、どこで読むと効果的か、前後の本はどうするかを考えました。おはなしの最後に、教訓めいた言葉や教えが添えられているものもありましたが、ほとんど取り上げていません。どんなふうにとらえるかは聞いた人それぞれの自由ですし、おはなしは、おはなしとして楽しんでほしかったからです。

会のあとで配っている「おはなし会だより」では、その日取り上げたおはなしとともに、楽しむヒントになればと思います。豆知識のようなものも紹介しました。

Q イソップの絵本は、どんな印象でしたか。

イソップの絵本には、2つのタイプがありました。1つは、1冊にいくつのおはなしが集められているもの。見開き2ページで完結するものが多く、おはなし会で読むと、子どもたちが、「はやっ」と、あっけにとられていることもありました。もう1つは、1冊に1つのおはなしの場合には、無駄な枝葉がついたように感じる場面もありました。本来、イソップは短いおはなしが多いので、ストーリーを変にいじらず、シャープな雰囲気や大事にしたほうが良いように感じました。

同じおはなしでも、画家によって描き方が違うので、それを見比べるのも、楽しかったです。

Q イソップをおはなし会に取り入れてみた感想は?

おはなし会のとき後ろのほうにいたお父さん、お母さん方が、「そっそう……!」とうなずきながら聞いてくださる姿は、イソップが日本になじんでいる様子を見るようで、親子共通の話題となるきっかけになったらうれしいな、と思いつながり読んでいました。なにより、子どもたちに「イソップ」に出会ってもらった、楽しんでもらえた、そんな機会をつくれたことは、よかったですかと思っています。

改めて、イソップのおはなしを読んだことは、確かに勉強になりましたし、私たちも楽しかったです。

おはなし会は、絵本やおはなしと出合う場です。その機会を生かして、これからもいろいろ工夫していきたいと思っています。

隆文堂おはなし会

毎月第4土曜日の13:30から15:00からの2回。
参加は無料です。事前予約も必要ありませんので、お近くへお越しの際はお待ちしております。

BOOKS 隆文堂

東京都国分寺市泉町3-35-1
最寄駅: JR 西国分寺駅南口1分 LEGA 2階
営業時間: 10:00 ~ 21:30
定休日: 無休
TEL: 042-324-7770



みんな来てね~!



安富ゆかり
やすとみ・ゆかり

東京都在住。JPIC 読書アドバイザー。書店、病院などで読みきかせを行うほか、読み手の育成の講習会でも活躍中。

宮田桂子
みやた・けいこ

東京都在住。JPIC 読書アドバイザー。書店、各種イベントなどで読みきかせを行い、子どもたちと絵本の世界を楽しんでいる。

中高生にもおすすめ

プチ特集

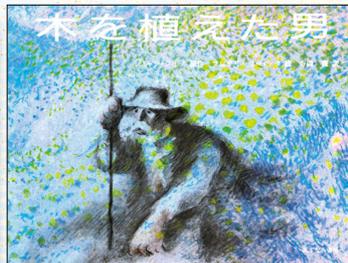
ノンフィクション絵本 を読もう

絵本は幼い子どものもものと思われがちですが、そんなことはありません。同じ絵本でも、年を経てから読むとまた違った味わいがあるものです。また、本当にあったできごとを題材にした絵本も多くあります。発明や発見の過程やある人物の足跡と、そのテーマはさまざまです。人権問題や歴史的なできごとの紹介など、社会的な題材を扱ったものは、中学生や高校生にも読みこたえたつぷりです。

1 PART

困難を乗り越えた偉人たち

数々の困難やトラブルにもめげず、あきらめずに前へ前へ進んだ先には、自分の成長と後世に残る結果が待っていました。



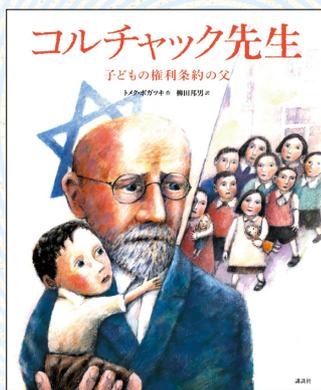
若い旅人が山深い荒れ地の果てで、ひとりの羊飼いの男に出会います。寡黙な羊飼いは、人の心をもすませる厳しい環境を変えるため、孤独の中で試行錯誤をしながら木を植え続けました。長い時間を経て木々は育ち、そこに人が集い始めます。

『木を植えた男』
原作/ジャン・ジオノ
絵/フレデリック・バック
訳/寺岡 襄
1,600円 (あすなろ書房)



『ジェドおじさんとこやさん』
作/マーガリー・キング・ミッチェル
絵/ジェームズ・ランサム
訳/渋谷弘子
1,600円 (汐文社)

ジェドおじさんは郡でただひとりの黒人の床屋さんです。いつか自分の店を開くという夢を持って、こつこつ貯金をしていました。親類の子が手術するため大金が必要になってしまったり、銀行がつぶれるという問題を乗り越え、とうとう店を開くことができました。



『コルチャック先生
子どもの権利条約の父』
作/トメク・ボガツキ
訳/柳田邦男
1,600円 (講談社)

医師として戦地に赴き、戦争の悲惨さを目のあたりにしたコルチャック先生は、孤児院を建て大勢の子どもたちを育みます。やがて、自らもユダヤ人ということで強制収容所に送られますが、そこでも命をかけて子どもたちのために尽くしました。



この人にあれもこれも

絵本作家さん こんにちは!



「かお かお
どんなかお」
などお楽しみ!

やなぎはら りょうへい
柳原 良平さん

海と船とぼくと

広告や装丁の仕事、そして子どものための絵本創作、さらには船への造詣の深さでも知られる柳原良平さん。現在、病氣療養中のため往復書簡での取材となりましたが、魅力あふれる作品の数々と創作活動の今を紹介します。

撮影/せんたあ画廊 取材・文/菅原千賀子

柳原さんは1931(昭和6)年の東京生まれ。5歳で京都へ移り、その視覚の記憶に残るのは、えんじと濃いグリーン、金の菊の紋章つきの昭和天皇のお召し車。青いピロロの服を着た白い靴下の同級生。凶鑑の魚や昆虫に、四十七士に新撰組。その目が美しいものをとらえると、家に帰るやいなや画用紙に描きとめて引き出しにしまい込み、そっと取り出しては「きれいだなア」と眺めているようなおとなしい少年でした。

海も港もない街で好きになったのが「船」。きっかけは町角の店先で買った船の絵はがきでした。じつと眺めているとまるで自分が航海しているかのよう。船の魅力にとりつかれた柳原さんは自らを「船キチ」と言います。船に魅せられた人生の幕がここから開きます。小学校1年生のとき、豪華客船・秩父丸をモデルに描いた大作にも挑戦しました。船室は白、船体は黒。青い海、茜色の空。紙の白地が見えないほどクレヨンを厚く塗って画面いっぱい描き、教室の黒板に貼り出されたのも誇らしい思い出のひとつです。

時は流れ、港の見える横浜に住まいを移し、楽しみながら大好きな船や絵本を描き続ける柳原さん。1冊ごとに未知の分野を探して入っていくおもしろさを感じながら、広い絵本の海原を今日も航海中です。

子どもたちと楽しむ

2014年の 絵本を振り返る

ページを繰るごとに物語と絵の
一体感が伝わってくる絵本のよさ

東京子ども図書館 張替恵子さんの10冊



『ひみつのかんかん』
作/花山かずみ
1,200円 (偕成社)

私が遊びに行くと、ひいおばあちゃんは宝物の入った缶の中身を見せてくれる。角がやぶれた白黒の家族写真、落語に連れていってくれた自分の父親のめがね、よそ行きの着物をしまった筆筒の取っ手……。各々の品にまつわる思い出話と、それを受け取る曾孫の反応が素直に描かれます。どんぐりまなこの女の子と鼻めがねの曾祖母の表情はユーモラス。丹念に描き込まれた絵から懐かしい時代が立ち上がります。



『ソフィーのやさいばたけ』
作/ゲルダ・ミュラー 訳/ふしみみさを
1,700円 (BL出版)

今日から夏休み。私は、田舎のおいちゃんとおばあちゃんの家へ行った。ふたりは畑でいろんな野菜をつくってるの。私にも小さな畑をくれた。にんじんとラディッシュとレタスを植えたいな。種まきに水やり、植え替えや害虫退治も。女の子ソフィーの体験を物語りつつ、園芸知識や野菜を育てる喜びを伝えます。大判の画面を数場面に区切り、土の中の様子をすっきり見せるレイアウトがしゃれています。



『メリーさんのひつじ ほんとうにあったおはなし』
作/ウィル・モーゼス
訳/こうのすゆきこ
1,600円 (福音館書店)

童謡「メリーさんのひつじ」のいわれを語る絵本。19世紀、米国の農村で暮らす女の子メリー・エリザベス・ソウヤーは、動物が大好き。生まれた子ヒツジがあまりに弱々しかったので、大事に世話をします。子ヒツジはメリーになつき、メリーの通う学校にまでついてきて……。作者は、国民的画家グランマ・モーゼスの曾孫。フォークアートの伝統を受け継ぐ、素朴なタッチの田園風景からぬくもりが伝わります。

『ねこくんいちばで ケーキを かった』
ロシアのわらべうた』

絵/ユーリー・ワズネツォフ 編訳/たなかともこ
1,500円 (岩波書店)

「ねこくん いちばで ケーキを かった/そのあと とおりで しろパン かった」。1960年代にモスクワで出版された2冊の絵本から、身近な動物や自然をうたったわらべ歌14編と昔ばなし1編を選んでいきます。「3びきのくま」(福音館書店)の画家による民族色豊かな絵が無邪気で、弾むようなリズムの歌と溶け合い、ナンセンスな世界が広がります。文字のまわりを飾る図案も美しく、何度でも眺め、口ずさみたくなる1冊です。



毎年、1200点ほどの新刊絵本が発売されていますが、昨年心に残った、子どもに読んであげたいと思った絵本はありましたか？ここから新しいロングセラーが1冊でも多く出ることを願って、2014年の絵本を振り返ってみましょう。子ども図書館の司書、児童書専門店の店長、絵本の編集者・書評家の3人から三者三様の感想を寄せていただきました。また、読者からのアンケートもまとめてみました。あなたのお気に入りの1冊は入っているでしょうか。

著作権保護コンテンツ

『希望の牧場』

3.11の大地震のあとの原発事故で、放射能が広がりました。立ち入り禁止区域では住人が避難する中、町に残り牛の世話をする牛飼いがいます。何百頭もの牛が生きているその牧場は、いつか「希望の牧場」と呼ばれるようになりました。



作/森 絵都
絵/吉田尚令
1,500円(岩崎書店)

『ゆうぐれ』

冬の夕暮れ、犬を連れて男の子とおじいさんが散歩に出かけました。お日さまが沈み始め、忙しそうな大人たち。自然の光が消えていくと、街には明かりが灯ってきらきらの世界になりました。光があふれるクリスマスの季節です。



作/ユリ・シュルヴィッツ
訳/さくまゆみこ
1,500円(あすなろ書房)

『地雷をふんだゾウ』

野生のゾウを飼いならして利用する文化が、古くからアジア各地にあります。そんな国々の間で戦争が起こり、何百万という地雷が埋め込まれました。地雷を踏んで片足を失ったゾウは、重い体を支えられず弱っていきます。



写真・文/藤原幸一
1,500円(岩崎書店)

『タヌキ』

著者が長年にわたり観察を続けた、キツネやタヌキの生態を紹介した写真絵本です。キツネとタヌキは同じイヌ科の動物ながら、住む場所や行動時間、獲物などが競合しないよう棲み分けている様子がわかる興味深い記録です。



文・写真/竹田津 実
1,400円(アリス館)

『ぼくは まいごじゃない』

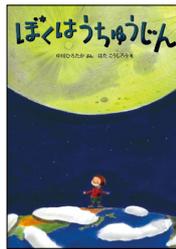
ぼくは、近所にオープンしたショッピングモールに、お兄ちゃんたちとやってきました。高い天井、長いエスカレーター。通路は、はしっこが見えないほどの広さです。あれ？ ぼくがトイレから戻ってきたら、お兄ちゃんたちがいませんでした。



作/板橋雅弘
絵/シゲリカツヒコ
1,300円(岩崎書店)

『ぼくはうちゅうじん』

キャンプに来ていたぼくは、日の出前にお父さんに起こされました。オリオン座を見上げながら、ギリシャ神話のこと、太陽のこと、宇宙のことなど知らなかったことをたくさん教えてもらいました。地球から宇宙へと、世界は果てしなく広がっていきます。



文/中川ひろたか
絵/はたこうしろう
1,400円(アリス館)

ぜーんぶプレゼント
もう読んだ？
新刊
100!!

2014年9〜11月に発売された新刊絵本の中から、読みかきせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすべきな時間を過ごしてください。プレゼント応募はアンケート用紙、またはウェブから。

※出版社五十音順

マークは乳幼児から、

は中・高校生も楽しめる本です。

『くろいながい』

しっぽが、夜よりもくろくながいと自慢するネコと、くろくながい髪の毛は、切ったことがないという女の子が仲よしになりました。どっちのほうが長い？ 「先っちょまでたどってみよう」。さて、どこまで続いているのでしょうか。



作/おくはらゆめ
1,200円
(あかね書房)

『いのちは』

命は見えないところに、石の裏に、岩の陰に、隠れてじっと春を待っています。クマリスも、春になれば、命はいっせいに歌いだします。命の中に心が育ち、心が誰かの命にあなたがい明かりを灯します。「いのち」と「こころ」から気づく大切なこと。



作/内田麟太郎
絵/たかすかずみ
1,300円(WAVE出版)

『みんなうまれる』

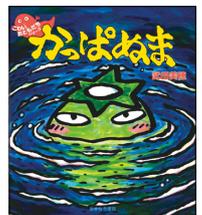
太陽がほほえむと、草花が芽吹き、そのまわりで小さな虫たちも生まれてきます。太陽が手をさしのべれば色が生まれ、ぬくもりに包まれてぼくたちも生まれてきたのです。すべてのものが生まれる美しい瞬間は、私たちの心をおだやかにしてくれます。



作/きくちちき
1,400円(アリス館)

『かっぱぬま こわいおともだちシリーズ』

むかしむかし、村のはずれの沼にこわーいカッパが住んでいました。沼にやってきた犬のシロは、「かっぱぬま」にされてしまいました。次にやってきたけんたが昼寝をしている間に、プチャまが大活躍してみんなの危機を救います。



作/武田美穂
1,300円(あすなろ書房)